文献紹介

〈フェノバルビタール坐薬を使用した在宅緩和鎮静： 死亡までの時間、患者の特徴、投与プロトコル〉

Title: Home Palliative Sedation Using Phenobarbital Suppositories: Time to Death, Patient Characteristics, and Administration Protocol

Authors: Judith Setla and Silviu Valeriu Pasniciuc

Journal：Am J Hosp Palliat Care. 2019;36(10):871-876. doi: 10.1177/1049909119839695. PMID: 30947512. https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/30947512/

【背景】米国やその他の国々では、ほとんどの人が希望する死に場所として自宅を望んでいる。しかし、難治性の症状、特に重要な鎮静が必要な場合は入院が必要な場合もある。セントラルニューヨークのホスピスでは、10 年以上前から抗精神病薬やベンゾジアゼピン系薬剤を十分に使用しても十分な鎮静が得られず、自宅での安静を希望する患者に対して、フェノバルビタール配合坐剤を使用している。

【目的】(1) 家庭における鎮静を目的としたフェノバルビタール坐剤の使用について説明する。(2) 坐剤の潜在的使用者と実際に使用された患者の特徴を理解する。(3) フェノバルビタール坐剤の使用開始後、死亡するまでの時間を測定する。

【設定】ニューヨーク州のメディケア認定非営利ホスピス組織

【方法】レトロスペクティブ・ケースシリーズ

【結果】18 ヵ月間にホスピスに登録された 1675 人の患者のうち、90 人（結果の項での記載は 89 人）の患者の自宅にフェノバルビタール坐剤が治療見込みで配置かれた。90 人中 31 人の患者で坐薬の使用が開始された。坐薬を配置し使用が開始された患者における主な症状は興奮性せん妄であった。両群（注：論文本文では 1675 人を target 集団、90 人を potential users、31 人を users として区別しており、両群とはこの後者 2 つの群と思われる）とも癌の有病率が target 集団よりも高かった。フェノバルビタール坐剤の投与開始後の死亡までの平均時間は 38.8 時間であった。坐剤使用者のうち入院した者はいなかった。

【結論】緩和的鎮静を目的としたフェノバルビタール配合坐剤は、難治性の症状にもかかわらず在宅での療養を望む患者と家族にとって選択肢となる。

【コメント(CM)】

人生の最期の迎え方に関する全国調査結果（日本財団：人生の最期の迎え方に関する全国調査 2021）によると、死期が迫っているとわかったときに人生の最期を迎えたい場所として、当事者は 58.8%が「自宅」、次いで 33.9%が「医療施設」と回答している。その理由は、「自分らしくいられる」「住み慣れているから」などがあげられた。日本においても今後、この論文にあるように、必要に応じて坐剤が自宅に配置される可能性が考えられる。

せん妄が発症したときの選択肢として、内服、坐剤、注射があるが、自宅に配置するといった観点から考えると、内服あるいは坐剤となる。現在、非定型抗精神病薬であるクエチアピンやペロスピロンの坐剤が病院で院内製剤として作製され、せん妄患者における効果が論文で報告されつつある。今後に期待したい。

Abstract

***Background*:** Most people in the United States and other countries cite their preferred (好む) location of death as their homes. However, intractable (難治性の) symptoms sometimes require hospitalization, especially if significant sedation becomes necessary. For over a decade, Hospice of Central New York has been using compounded (配合剤の) phenobarbital suppositories (フェノバルビタール坐剤) with individuals in whom adequate sedation has not been achieved using sufficient doses of antipsychotics (抗精神病薬) or benzodiazepines but prefer to remain in their homes.

***Objectives*:** (1) Describe the use of phenobarbital suppositories in homes for the purpose of sedation. (2) Understand patient characteristics of potential (潜在的な、可能性・見込みのある) users and those in whom suppositories were actually used. (3) Measure time to death after initiating the phenobarbital suppositories.

***Setting*:** Medicare-certified not-for-profit hospice organization in New York State.

***Method*:** Retrospective case series.

***Results*:** Of 1675 patients enrolled in hospice over an 18-month period, phenobarbital suppositories were placed in the homes of 90 patients for potential use. Suppositories were initiated in 31 of the 90 patients. Agitated delirium (興奮性せん妄) was the major symptom for which suppositories were placed and initiated. Both groups had a greater prevalence of cancer diagnoses than the target population. The mean time to death after initiation of phenobarbital suppositories was 38.8 hours. None of the users were hospitalized.

***Conclusion*:** The use of compounded phenobarbital suppositories for the purpose of palliative sedation is an alternative (代替の) for patients and families who desire to remain home despite refractory (難治性の) symptoms.

2025.3.19